OECD調査とベトナム旅行体験から平和の文化とアジアの教育

伊藤武彦 和光大学教員

て、よい教師が得難いことは、我々の調査であちこち見 は、よい教師が得難いことは、我々の調査であちこち見 は、まい教師が得難いことは、我々の調査である。 ところが教育の中身のカナメである教師の質 はついて考えたい。 そのための一つの手がかりとして、 について考えたい。 そのための一つの手がかりとして、 について考えたい。 そのための一つの手がかりとして、 ところが教育の中身のカナメである教師の質 は、まい教師が得難いことは、我々の調査であちこち見 から始めることとしたい。

アジアの学校で経済事情などの理由で教員の地位が低

発展に寄与」し、「世界貿易の拡大」に尽くす(条約第

いとう・たけひこ

----教員の質とOECD調査

OECDの教員調査とは

の質』という本がある。OECDといえば「世界経済の**--教授と教師

、 施された。
一条より) 国際機構である。一九六〇年発足、原本が書
九九二~三年にうち一一カ国の参加によりこの調査は実
北九二~三年にうち一一カ国の参加によりこの機構の一日本を含む、いわゆる先進国が大部分だ。この機構の一日本を含む、いわゆる先進国が大部分だ。この機構の一条より) 国際機構である。一九六〇年発足、原本が書

能力を伸ばすこと……の奨励」など)をテーマに、教員は「教師と生徒の自治」(具体的には教師のカリキュラ学校のあり方を議論してまとめた。例えばフィンランド学校のあり方を議論してまとめた。例えばフィンランド学校のあり方を議論してまとめた。例えばフィンランドーの場所を選び、小・中・高等学校数校を実地調査いる教育政策を選び、小・中・高等学校数校を実地調査にある。

心理学・教育心理学の立場から 国連・ユネスコの平和の文化の 関連・ユネスコの平和の文化の にグミー・チンパンジー)。ホームページはhttp://www.wako. ac.jp/~itot/

校が選ばれ、特色は「生徒の父母も祖父母もこの学校の の学校」(全学校の六○%を代表して)までの五校を選 養成大学付属小学校の研究校から教員一~三名の「田舎 んでいる。日本は「新任教員研修」の事例研究として一 の教師との「話し合いを計画」していた。また「小グル か」であった。

たせることにある……ことは数カ国の報告からも明ら ープ指導の目的は、生徒に自分の学習に対して責任を持

調査結果を総合して「教師及び指導の質」一四項が、 望ましい教師の条件とは 卒業生」とある。

それぞれ実例をあげて述べてある。いくつかを例示しよ

クラスに入ると温かくあいさつ……生徒と積極的に交わ う。「子どもを愛せよ」ではイタリアの女教師が「……

り……難しい子どもに対して接触を図り……援助する。

成就しない……これは難しいことですから、自分を鍛え こう語る。「もし子どもを好きにならなかったら、何も 段だと考えている」。また、スエーデンの小学校教師は ……よくほめてやる。……失敗してもそれから学べる手

いたことが証明された」とある。

学校では生徒に個人個人の目標を決定させ」、そのため ことを象徴的に示していた」し、オーストラリアの「小 …目を光らして全員を監視する管理型はもはや必要ない の「小学校の授業参観をした教室で、教師の机が従来の ように生徒の前に置かれているのは一つもなかった。… 「グループを効果的に」の項では、ニュージーランド

> ーストラリアの高校で、「十数種の単元を与えて個々の 「多くの指導法と学習の様式をマスターせよ」ではオ

け、あとで「正式に質問」したら「生徒は立派に覚えて の騒音の中でジェスチャーで「文章と句読点」を教え続 る穴を開けるために」来た工事人に入りこまれ、電気鋸 徒からなって」いるクラスで授業中、「ドアに窓をつけ 引用されている。彼は「情緒的に問題があるとされた生 に……」の項には「アメリカの教師が書いた笑い話」が の……『縦の時間表』」が実行されていたし、「臨機応変 生徒がその中から六種を選んで……」という「自由裁量

てはいけません。相手は子どもでこちらは大人なんです」。 なければなりません。……子どもを敵だとか脅威と感じ 問題について研究する計画を立てたが、理科の大部分の が協力して」生徒たちの演劇の企画・上演を助けたり る」例もはっきりと述べてある。 教科書の改訂をしたりした数例が載っている。うまくい 教師が乗り気でないために、熱意は消え去ろうとしてい ったケースばかりでなく、「理科と社会科の教師が環境 「他の教師と協力せよ」では、「いくつかの教科の教師

校で「移民に関して多民族文化の問題をカリキュラムに 最後の「社会全体に貢献せよ」では、アメリカの中学

委託にこたえる責任があ」り、両立が難しいらしい。という、の生徒をバカロレアに合格させるという国の年は工芸品を持参してクラスに紹介した。教師の中には自分の移民の先祖について語る者もいた」。「フランスの自分の移民の先祖について語る者もいた」。「フランスの自分の移民の生徒をバカロレアに合格させるという国の教師は「八〇%の生徒をバカロレアに合格させるという国の教師は「八〇%の生徒をバカロレアに基づいて短い話を作位置づけ、移民とのインタビューに基づいて短い話を作位置づけ、移民とのインタビューに基づいて短い話を作位置づけ、移民とのインタビューに基づいて短い話を作

ターやほかのデジタル情報技術」導入の現状が集められ「新しい技術を取り入れよ」の項に各国の「コンピュー「新しい技術を取り入れよ」の項に各国の「コンピュー整と指導の役割をさせている」として、「生徒指導、… 整と指導の役割をさせている」として、「生徒指導、… 所、「経験を積んだ教師に主任という名称を与えて、調所、「経験を積んだ教師に主任という名称を与えて、調

七〇頁にわたる報告総括の中で日本の引用はただ一カ

質の高い学校を実現するには

ているが、ここにも言及はない。

続く章には、国別研究でかなり共通に見られた政策を、

あげて論じている。簡単に解説しよう。個々の教師ではなく学校の望ましい姿を、八つの要因を次はこの本の結論的内容すなわち「質の高い学校」で、

とない。 とう こう こう こう こう こう はい こう こうけて生まれる……ある価値を皆で共有しようという……

(二)「指導と学習の組織化」=「高レベルの資質を擁学校が全体として機能するための指標、枠組みである」。

便宜主義でなく価値に基づく、学校レベルでの生徒の学持っている」。「組織化に関して四つの点」は、「官僚の指導と学習の組織化があって、それらが明らかに関連をする学校を……選ぶと、一方にビジョンと価値、他方に

(三)「管理体制」とは「組織の構成員が……目的を実価とカリキュラム展開の形」である。習の組織化、協力を可能にする教師の仕事の組織化、評

の三条件が必須である。……各人が自分の役割が楽しく報われていると感ずる」……各人が自分の役割が楽しく報われていると感ずるの行動を引き出す枠組み……役割と責任がお互いに明確現するのを援助するため……の学校の組織」で、「全員

外部からの政策によって作られたものとは好対照をなすことで……。『理想的な学校のタイプ』とは、典型的に策に積極的に反応した学校はたとえあるとしても少ない「事例研究校の際だった特色の一つは国家又は地方の政(四)「政策立案過程」には面白いことが書いてある。

ものである」と述べられている。

(五)「リーダーシップ」=「研究対象の学校にはほと

り、そうした「仕事をなしとげた例」は「学校が冒険を作ることは学校が質の高い教師を生む重要な条件」であ個々の教師が「リーダーシップを発揮するような機会をんど例外なしに教育的指導力のある校長がいた」が、

許す柔軟性があったから」である。

力するという言順関系を樹立する必要がある一のである。「教師が自発的に教育的考えを大切にし、……同僚と協教員資質の「長期にわたる発展向上事業」の展望にたち、ることはかえって望ましくない結果を生む」のであり、必要なことであるが、「あまりにも官僚的な指導を強め必要なことであるが、「あまりにも官僚的な指導を強め

(七)「地域社会との関係」=「地域との連携が強けれ(七)「地域社会との関係」=「地域との連携が強けれて四里」で、「学校支援の奉仕作業……資金集め……カリの理」で、「学校支援の奉仕作業……資金集め……カリがまという信頼関係を樹立する必要がある」のである。力するという信頼関係を樹立する必要がある」のである。

するもので……重要な要素は冒険を冒すことと共同実験「学校教育の背景をなすすべての状況が正しければ進化体があるというものではない」が、望ましい学校文化は、(八)しめくくりは「学校の文化」である。「それは実

に花開くのである」。「問題なのは学校の精神である。人あることによって、教師の幅広い協力が行われるところを奨励すること……学校全体に創造性と柔軟性が底流に

間として認められた子どもがその考えの中心にあること

動機と能力)、個々の学校(良い指導を支援し教師間で終章は「教師の資質の根源」として「個々の教師(のである」。官僚的な雰囲気にはそぐわないのである。

の三者の調和が重要、とまとめている。ター、教員評価組織、教員教育、情報組織等が必要)」ター、教員評価組織、教員教育、情報組織等が必要)」衆の支持、補助的政策のオプション、進歩の状況のモニ衆の支持、補助的政策のカプション、進歩の状況のモニの重権と負力。 偏々の学校(長に指導を支持し書館間で

教育領域の研究を、それも単なる評論や提案ではなく、経済協力のための組織であるOECDがなぜこういう

この調査報告から読み取る三つの意味

念ながら、本書からは、はっきり読み取ることはできな

時間と資金を投入して国際的事例研究をやったのか。残

面だけでなく、教育面でも新植民地化につながる、とい迫る際の参考かもしれないし、もしそうなら政経・社会から、経済協力の見返りに政治・社会諸面の政策改善をく「非加盟諸国の健全な経済の拡大に貢献する」とあるかった。前述した条約第一条の二項に、加盟国だけでなかった。前述した条約第一条の二項に、加盟国だけでな

067

書の限りでは、そんな底意は感じられず、現代の学校とう見方も可能かもしれない。しかし少なくともこの報告

の提言を受け止めることにしよう。 れたわは方が見られる。ここはむしろ素直にその積極面から、そ これで数教師の実状を広域で解明し真剣に考えようという意図の る程度の

残念なのはこの調査では、丹念な事例収集と検討・総

合のすべてが欧米中心のいわゆる先進国に偏って、アジーなで長々と、このデータを紹介したかというと、主と教育』の意図に沿わない、ということだ。にもかかわら見なくてはならず、本書の全体テーマである『アジアの見なくてはならず、本書の全体テーマである『アジアの日本一国だけである。したがって、その限定の下にして以下の理由からである。

②学校文化の重要さへの着眼

第一は、教育状況の国際調査を制度や就学率等の明示①国際的教育調査の面白さ

に絞り、しかも関係データの万遍ない収集でないことに、的な事柄でなく、教師と教師を中心とする学校のあり方

をあて、評論でなく事実に基づいて比較検討し、共通のにくかった教師の問題に、教育政策の側面から多彩な光的だったとはいえない。個人の内面にも入るためとらえ観察、聴き取り、記録するという方法は、これまで一般最新の教育政策を選んで、その参考になりそうな対象校注目したことである。一一ヵ国の研究者がそれぞれ自国

ったように、教師・学校・外部政策の三者の関わりがあおもしろい調査であると思う。その結果として終章にあ問題を浮かびあがらせようとしている。あまり例のない

いのようなものが出来上がる。

これが、「実体としては無い」目に見えない「学校文

ら照らし出す一助にはなる、と思った。 に頼りがちだった学校の姿と教師の像を、新しい角度かいにも、調査を実施した研究者たちの主観が二重、三重外にも、調査を実施した研究者たちの主観が二重、三重なる保証し難いことが多い)と個人の体験的主観的評論に乗りがちだった学校の現状とあるべき姿が、すべて解明さる程度の説得性をもって抽出できたといえる。もちろん

その学校特有の雰囲気とか慣習、全体として前向きの勢たちのリーダーシップがうまくかみ合って機能すると、た結論部分にある。個々の教師の資質と学校の方針、そた結論部分にある。個々の教師の資質がのびのびと本領発いない。むしろ仕事をする上で障害になると感じている」のである。つまり個々の教師の資質がのびのびと本領発のである。つまり個々の教師の資質がのびのびと本領発のである。つまり個々の教師の資質がのびのびと本領発のである。つまり個々の教師の資質がのびのびと本領発のである。つまり個々の教師の資質がのびのびと本領発のである。つまり個々の教師の資質と学校の方針、その学校特有の雰囲気とか慣習、全体として前向きの勢たちのリーダーシップがうまくかみ合って機能すると、その学校特有の雰囲気とか慣習、全体として前向きの勢その学校特有の雰囲気とか慣習、全体として前向きの勢たちのリーダーシップがうまくかみ合って機能すると、その学校特有の雰囲気とか慣習、全体として前向きの勢たちのリーダーシップがうまくかみ合って機能すると、その学校特有の雰囲気とか慣習、全体として前向きの勢たちのリーダーシップがうまくかみ合って機能すると、

たちとの関係が同じように開放的・協力的となり、彼らも 化」である。この空気の中で学校本来の仕事である生徒 より基本的に、力による勝利に価値をおく、これまでの

めて、「実体として無い」ものの実在をつきとめ得たのだ。 づく評論も有用だろうが、実地調査を複数国でやって初 また「自分に自信を持って」のびのび発言し行動できる、 「人間として認められた子ども」になるのだ。直観に基 そして地球上のすべての国や地域に、たとえ三年・四 二一世紀を迎えたのである。これについては、改めて詳 きの行動こそが大事という「平和の文化」に到達して、 るということである。一人ひとりの生き方、日々の前向 で平和と非暴力を貫く「平和の文化」への移行がユネス コや国連などをはじめとして、国際社会で提起されてい 「暴力の文化」から、日常的な個々人の意識と行動の中

述しよう。

度の改善がそれぞれに進められながら、低い給料と社会 師は教育向上のカギの一つと一貫して認められ、養成制 われわれのグループが訪問したアジア五カ国で、良い教 との関わりである。この本の最初の石原の総括文通り、 ③アジアの教師と学校 第三の意味は、いよいよ本題である「アジアの教育」

ので、一人ひとりの人生を大切にし合う苗床としての れらから発してまじり合い高まるエネルギーのようなも は教員が喋ることや校舎・教具等の具体物ではなく、そ るものを最大限まで伸ばすことができるだろう。「教育」 政府の政策要請に集中したり教員の給料を上げることで そういう結果が先進国特有でなく学校一般のものならば、 子どもの発達が「学校文化」によること大ならば、また、 問題は解決するのではなく、より日常的な人間関係を初 もしOECD調査報告が示したように、教師の成長と

しで、他の途上国にも同様の状況が推察できた。

的地位のため高収入の職業に「優秀な人材」を奪われ放

が一人一冊なくても、子どもたちはその中で各自の持て るような「文化」を持つなら、たとえ校舎がなく教科書 適温・適湿で小さな種を守り育て、教員自身も育てられ という言葉は苗床という意味に由来する)。この苗床が 形づくる中心となる基礎の「苗床」である(「セミナー」 諸地域の「学校」は、やがて子どもたちが成人し社会を を背景にしてだが)、日々パーセントを増やしつつある なった現在(もちろん不就学や中退を減らす不断の努力 年でも義務教育制度と、粗末だろうと学校が在るように

|文化| なのだ。

このことと関連して思い至るのは、「平和」のために

平和的解決をはかるしくみなどはもちろん重要なのだが、 は、核の惨禍を語りつぐことや国家間や民族間の紛争の 共に、「自分が愛され認められているという自信」「仲間 実的持続的な開発が、並行して必要となる。教師・生徒

め未来へのビジョン、分け持つリーダーシップ等々の現

移行する可能性もあるかもしれない。 や人間関係が残存しているなら、近代化をバイパスして づくりだ。途上国の特に農漁山村では、もし素朴な人情 と共に成長できる喜び」が第一の価値であるような学校 なる。前任者が建てかけて去った小屋を改修して一人で

を描写している。日本でいえば田山花袋の『田舎教師』、 が、間接的に学校の様子を、したがって学校文化の一面 見当たらない。わずかに学校を舞台にした文学作品の類 を知らないし、まして複数国にわたる統一比較検討例は でなくこうした面にふみこんで体系的に調査研究した例 残念ながらアジアの学校の現状について、制度や統計

だし、戦後は石坂洋次郎の『青い山脈』や石川達三の 『人間の壁』が、敗戦による解放期や学テ・勤評等で再 島崎藤村の『破戒』、漱石の『坊っちゃん』もその一つ

び暗くなった学校現場をそれぞれ生き生きと描き出した。 ス語に翻訳されて、わがチームの「アジアとの交流活動」 な小学校の実話であり、石原の総括文にある通り、ラオ 黒柳徹子の『窓ぎわのトットちゃん』は戦争末期の特異

を促進する作品となった。

に歌や物語、ゲームをやって子どもたちは学校を好きに の小さな学校でピアは三、四年を受け持ち、朝は始業前 任した青年教師ピアの一年間の物語である。四年生まで 東ウボン県の小さな村の小学校にバンコク師範を出て赴 だことがある。代表的なのは『田舎の教師』で、タイ南 タイの農村の小学校を舞台にした小説を、二、三読ん

> ころが校長は一年生担任を兼ねるが酒にバクチで学校は 住み、周囲に菜園を耕し肥料の溜を作って生徒たちとト マトやスイカ、果樹を植え、売った金で鶏を飼った。と

りで、「学校の文化」どころではない。郡の課長など小 休みがち、もう一人の同僚は村娘を追い回すダメ教師ぶ

役人がいばり返り、村のボスは無茶の限りを尽くす。結 採をする現場を見たピアが、正義感から写真にとり新聞 都会から赴任した教師が、貧しい農村の子らが魚の釣れ る途中を撃たれて死ぬ、という悲劇で終わっている。 に告発したことから村を追われ、だまされて小学校へ戻 末は、村一番の資本家である華僑の製材業者が違法の伐 (二)』で、短編のうちいくつかが小学校を扱っている。 もう一冊は『農村開発顛末記――タイ国農民小説選

さに打たれ、自分が教えるものはない、と次第に農民の が、著者の教師体験に根ざして、おそらく実状通りの迫 る場所など自ら食べ生きる術を知って行動するたくまし いに郡役所まで行き、往復七日学校を留守にする話など 一人になっていく経過を描いたもの、教師が月給をもら

変わりしていることであろう。今ではわれわれも見た通 りアジア各地で近代化が進み、主に都会での調査だが子 これらは一九八〇年前後の作品で、現代の学校では様 力で書かれていた。

どもたちは生き生きとこちらの問いに答えたし、自分の

顛末記――タイ国農民小説選 *3 ニミット・プーミタウオ 、野中耕一編訳 『農村開発

(二) 】 井村文化事業社、一九八

宮田竹二郎訳『田舎の教師』井 *2 カムマーン・コンカイ著、

村文化事業社、一九八〇年。

りつつあるようだ。 に伴う競争や資格・立身のための勉強が増して、人間と 将来に夢も持っていた。その反面で日本同様に、近代化 して認められる自信や共に伸びる喜びは保障され難くな

ろ抑圧的な事例のみが引用されているのは、偶然ではな さくら小学校という架空めいた校名で、主任制などむし てみるとOECD調査で日本の学校が一校きり、しかも 合わせる「負の学校文化」が一般化しているようだ。し 数で格付けされて自信を失い、弱者を虐げることで埋め 日本の現実はその先頭を走る惨状と言ってもよく、点

学校文化と平和の文化

いかもしれない、と思えてくる。

実は、ここから先が本題なのである。いま私の手元に

平和構築に努力するだけでは……・予防外交を行うだけ

よって分離するだけでは……紛争によって荒廃した後で もの間をかけて我々は、戦っている勢力を平和維持軍に によって妨害され続けてきました」と書き出し、「何年 の世代を守る』ことは……紛争、暴力、憎悪そして貧欲 る。「国際連合の主要な任務である『戦争の惨禍から次

これを広め実現する活動をユネスコ(本部パリ)が引き のための平和と非暴力の文化国際一〇年」なのである。 続く二〇〇一年から二〇一〇年は、「世界の子どもたち ○年は、国連総会が定めた「平和の文化国際年」であり、 の人びとに十分知れ渡っているとは言い難いが、二〇〇 月初版である。関連政府機関の不熱心もあり、日本国内 ている「平和の文化をきずく会」の編集で二〇〇〇年五 ユネスコ提言』というブックレットがある。私も関わっ 『暴力の文化から平和の文化へ――二一世紀への国連・

> 集まりであり、日本のユネスコ協会連盟とも協力しなが く会」は日本独自に結成された自発的な民間人・市民の 計画し実行することになっている。「平和の文化をきず

ら、活動を進めている。

com/peacecom/cop, *5 http://homepage2.nifty 提言』平和文化、二〇〇〇年。

―二一世紀への国連・ユネスコ 『暴力の文化から平和の文化へ― *4 平和の文化をきずく会編

*6 http://www.unesco.org/

http://mirror-japan.unesco.org/

受賞したコフィ・アナン国連事務総長のメッセージがあ

このブックレットのトップに、後にノーベル平和賞を

平和の文化とは

*7 http://www.unesco.or.jp/

なければならない」とあることの実現である。 「同行動計画」(いずれも一九九九年九月一三日、平和の 続く頁には、国連総会決議「平和の文化に関する宣言」、

これは、ユネスコ憲章に「戦争は人の心のなかで生まれ

ばなりません。すなわち、平和の文化が必要なのです」。 のためには、我々はもっと深いレベルでも行動しなけれ がわかった」としている。したがって「永続性ある平和 では……」と三項重ねて、「いずれも十分ではないこと

るものであるから、人の心のなかに平和のとりでを築か

文化をきずく会訳)の全文がある。「宣言」の第一条は、

受け、各国のユネスコをはじめ諸機関が具体的な行動を

かで平和の促進に貢献していく価値観・態度・行動様式 これら「平和の文化」は「個人、グループ、諸国民のな 守る、文化的多様性と相互理解、などが列記されている。 の平等、表現・情報の自由、開発・発展とともに環境を である」として、生命の尊重、人権の尊重と促進、両性 動の伝統や様式、あるいは生き方のひとまとまりのもの 「平和の文化とは、次に掲げるような価値観・態度・行 はるかに越える、さらに言えばその国が他民族にまさる 優れた校長、教員集団が一丸となって、わが校が他校を あり得るのである。 力を持って彼らをリードし支配する方向に進むことも、 の楽園づくりの域を出ていないといえよう。極言すれば、 れらは、なお容れ物としての学校であり、いわば子ども た子どもが中心にいる」ことも重要である。しかし、こ

ての人に教育を、女性とくに少女たちの教育への機会均 精神をもって平和的に解決すること」を学ばせ、「すべ を、人間の尊厳を尊重するような精神、寛容と非差別の 具体的に、子どもたちに「早い時期から、あらゆる争い 「平和の文化に関する行動計画」の方はさらに、詳細

文化を建設する主要な手段の一つである(第四条)」。

と生き方を通じて……発達し続けていく (第二条)」も

前述した通り、地球上のどんな奥地、貧しい国でも、

等を保障することなど」を定めている。

平和の文化を中心とした学校文化の重要性

体に創造性と柔軟性」があって、「人間として認められ

なければならない。

の学習の組織化」等々はもちろん必要であり、「学校全 る。「指導力ある校長」の下に教員たちが各々「リーダ ここで振り返ると、かなり限界のあることがわかってく のであり、とりわけ「あらゆるレベルの教育は、平和の ーシップを発揮する質の高い人々」であること、「生徒 これまでに述べてきたOECD調査とその到達点とを ざすことはできないであろう。学校は、そこで学ぶ子ど なかったら、やはり優越・支配と不満・反逆への道を閉 らが、ヒューマニスティックな平等観に裏打ちされてい 引用した教育のことと並んで、「持続的な経済および社 て持つべきである。「平和の文化行動計画」には、先に にこうした人類共通の価値へのめざめを共通の目標とし つつある。「実態としては無い」学校文化は、その基礎 度・行動を養う機会は、その意味でかろうじて保障され 生命と人権を尊重し、異文化を認めて相互理解する態 くなったといえよう。自国民だけでなく、すべての人の 小学校とたとえ数年でも義務教育制度を持たない所はな 世界の子どもにひらかれ、その未来に向かう視野を持た もたちにとってのみ有益・快適なだけでなく、同時に全 の扱いや開発援助などが具体的に書かれているが、それ 会的発展を促進する行動」、たとえば発展途上国の債務

む必要がある。そのような事態は日常多く起こりうるの や話のうまさだけでなく、平和的な解決をする体験を積 ぶ。それと並行して、困ったことにぶつかったとき、力 は学校で文字や数をはじめ、自然・社会・歴史等々を学 そのための具体的な方策を考えてみたい。子どもたち かし国連の号令で、すべての事が成るわけではない。 いたのは、まことに的確な気づきであるといえよう。

感覚で楽しい話を通して学ばせる方法もある(たとえば、 実践できるようにしてやることが大切であろう。ゲーム 『平和的手段による紛争の転換』に載っている「十七頭

で、チャンスを逃さず適切な指導をし、やがて自主的に

異民族の子どもと接する機会は貴重・重要であるが、

のらくだのお話」は適切である)。

テレビ視聴でもよく、ただし考えるポイントの適切な示 もしそのような機会が得にくいようであれば、ビデオや

改めて考えるチャンスといえよう。数学得点の国際的順 低下を憂える声も高まっているが、真の学力とは何かを 事的機会は減りがちなので工夫が必要であろうし、学力 唆は欠かせないであろう。週休二日制などでそうした行

位を気にする大人たちの視線は、やはり自民族の優越に

惨禍を経ても、 学校の場が随一であろう。 次世代に養う手だては、決して容易ではないが、やはり 集まる事実を自省させる。競争でなく、共存の考え方を 二〇世紀は、戦争の世紀であった。二度の大戦、核の 人類はなかなか賢くならない。国連が平

和維持軍の限界を体験で知って「人の心」にも重点をお

争の世紀に我々は持っている。今更いうまでもないが、 至難な方法をあえて実行してやり遂げた偉人を、同じ戦 寄り添う教師たちの寄与とこれからの責任は大きい。 インドの独立を武力で英軍に立ち向かうのではなく、大 人一人の納得が必要であり、子どもたちの柔らかな心に 幸いに暴力や詐術による解決ではなく、非暴力という

牧師がいる。ヒトラーの非道を宣戦ではなく、床屋のそ の根強い人種差別に武器を取ってでなく、バスに乗らな っくりさんを創造することで世界に納得させたチャプリ いという黒人たちの統一行動で対決し改善させたキング

衆の行動でかちとったガンジーがいるし、アメリカ社会

植民地化された悲劇の国チベットで、民衆の当然な独立 マがいる。こうした人びとのことを、大政治家の事績や え続けて四十余年、ノーベル平和賞を受けたダライ・ラ への悲願を武装蜂起でなく、国連や諸国の人権機関に訴 ンがいる。日本に近いアジアでいえば、第二次大戦後に

3 -平和の文化は世紀を越え国を越える

学校の実体と、そこでの教員の姿に目を向けよう。その

次は少し話を戻してもう一度、日本を含むアジアの小

はならない。

国威発揚の英雄たち以上に、子どもたちに知らせなくて

文化、二〇〇〇年。 的手段による紛争の転換』平和 伊藤武彦編・奥本京子訳『平和

*8 ヨハン・ガルトゥング著

と考えている。次のホームペー 段としてトランセンド法が有効 筆者は平和的な紛争解決の手

または http://www.transcendjapan.org/

http://www.wako.ac.jp/~itot/tran

デル」として生徒に伝えていく 和を創る心理学』ナカニシヤ出 ことを提唱している。 ためにたたかった人を「役割モ モデル論」心理科学研究会『平 版、二〇〇一年発行、は平和の

点を移して締めくくりとしたい。 上でごく最近、つまり二一世紀初頭での経験と情勢に視

時は明治、東北地方のある尋常高等小学校

シーンである。

で高等科生五〇余人に英語と外国史を教え(キリスト、本代用教員が月給八円の末席で、権威主義の権化のよう年代用教員が月給八円の末席で、権威主義の権化のよう年代用教員が月給八円の末席で、権威主義の権化のよう年代用教員が月給八円の末席で、権威主義の権化のよう年代用教員が月給八円の末席で、権威主義の権化のよう年代用教員が月給八円の末席で、権威主義の権化のよう年代用教員は全部で四人で、啄木自身に違いない二一歳の青教員は全部で四人で、啄木自身に違いない二一歳の青本

ルソー、トルストイなどの名前が出てくる)、生徒の人

室をめがけて、今でいえばデモ行進でやってくるという室をめがけて、今でいえばデモ行進でやってくるという気もあるため平生からにらまれていることの続きである。おりから様子を察知したらしい高等科生たちが、隊あ。おりから様子を察知したらしい高等科生たちが、隊る。おりから様子を察知したらしい高等科生たちが、隊る。おりから様子を察知したらしい高等科生たちが、隊る。おりから様子を察知したらしい高等科生たちが、隊る。おりから様子を察知したらしい高等科生たちが、隊る。おりから様子を察知したらしい高等科生たちが、隊を組み「勇ましい歩調で」、その歌を歌いながら、職員を組み「勇ましい歩調で」、その歌を歌いながら、職員を表していることの続きである。

前の歌やお話、生徒とともに耕し野菜を育てるなどの教 田舎の学校教師三人を彷彿とさせ、校長他のダメ教師ぶ ることは、まさに「平和の文化」そのものである。一校 勝が賛美されるなかで「生命、自由、愛」を高らかに歌 中学校で新聞配達などをしながら苦学する青年で、静岡 育活動をした。時は隔てられていても、アジアの二つの り、郡の小役人の権威主義もよく似ている。ピアは始業 に教員四人の小学校は、前に記したタイのウボン県での いあげること、障害者や貧困者への共感と連帯を表明す てくれたが、自分は辞退した、と泣いて述べるのである。 員も話を聞いて全財産を売っても汽車賃をつくると言っ く、乞食しながら郷里に向かう途中であった。先輩の教 に住む父の死を知ったが所持金がわずか六銭五厘しかな 一九〇六(明治三九)年は日露戦争直後で、軍歌や戦

て有力な支えとなるに違いない。そして、「教師の質」 ふむ」などの規制や圧力が一世紀近くたっても無くなっ 歩む姿をみると心強い。しかし、「校長の認定、順序を されている。教師とともに生徒が「平和の文化」の道を が、平和の文化をきずく会編集の『脱暴力宣言』に紹介 でミュージカル「アイラブ・憲法」に取り組んだ例など ていることは、こうした子どもたちの意識と行動にとっ 目で「教育を通じて平和の文化を育てる活動」を提起し ていない事実も、一方ではふまえる必要がある。 した展示をおこなった中学生たちや、複数校からの参加 している。また、文化祭に環境・人権・平和をテーマと てるために、募金活動とデザイン公募などの活動に参加 国連決議が「平和の文化」を推進し、特にその第一項

ベトナムとアフガニスタンのこと

が平和の文化との関わりのなかで深く問われている。

勝ち取った稀な国である。我々の「アジアの教育」研究 では日本軍の占領で苦しめられ、その後もフランス、さ ごすことができた。これも今更いうまでもないが、ベト チームは、ラオス、カンボジアを訪問調査し、その前後 らに最強国アメリカと長年戦って、とうとう完全独立を ナムは前世紀以来フランスの植民地にされ、第二次大戦 二〇〇一年末の一週間ほどを、縁あってベトナムで過

木から一世紀近くたち、二〇〇〇年代に入った今、日本

髙等科生徒は、今でいえば中学生の年齢であろう。啄

の中学生・高校生たちは「世界の子どもの平和像」を建

の年にはタイとシンガポールにも行ったが、ベトナムは

鋭い批判の精神を抱きながら肺結核で世を去った。

ビになり、後には大逆事件裁判につよく関心を持つなど、 とし、啄木自身は生徒のストライキを扇動したとしてク 姿を、今読むことができる。しかし前述したとおり、ピ

アは社会的不正を見過ごすことができず告発して命を落

な状況のなかで「平和の文化」を実践した先駆者たちの 地域で、小説というフィクションの世界ではあれ、困難

> 化、二〇〇一年。 化国際十年」にむけて』平和文 たちのための平和と非暴力の文 『脱暴力宣言――「世界の子ども 平和の文化をきずく会編

* 10

東南アジアで訪れ損ねていた国の一つであった。 南のホーチミン市(旧サイゴン市)と北の首都ハノイ

剤の被害を受けたたくさんの子どもたち、虐殺・拷問さ 市で戦争証跡博物館、革命記念館などに行って、枯れ葉

る所にいる」とアメリカの巨漢の兵士たちを嘆かせ、と 取ったのは、もちろん非暴力によってではない。しかし、 妙なゲリラ活動をし、「ベトコンはどこにもいないが至 んでやっと歩ける三層の地下道を人力で掘り抜いて、巧 亜熱帯のジャングルに全長二五○キロメートル、人が屈 た女性が何万人もいることも知った。彼らが独立を勝ち れたベトナムの人びとの写真を見、夫も子もすべて失っ

できたのは幸いであった。 が残念であるが、おおむね研究方向に沿った調査活動が きた。都合で小学校を訪問することはできなかったこと 授業を参観し、子どもたち・学生たちと接することがで ら大学まで各段階の学校を訪問して、教師たちと懇談し であり、最後の王朝の都でもあったフエ市で、保育園か 南北ベトナムを分けた一七度線に近いかつての激戦地

見ものとさえいえるものであった。

場合に備えて、鉄針を植えた落とし穴が掘ってあるのは 見学したが、敵が地下道の入り口を見つけて入ってきた うとう戦意を失わせるに至ったのである。我々も一部を

たのが印象的であった。

四半世紀余り、家々が建ち街がよみがえったことと伴う ほとんど全土が破壊され、不毛の荒れ地となってから

ないそうである。

常に内容を新しくし、教え方も研修で改善・研究を怠ら

板に貼って大声で読み上げ合った。教科書は国定だが

を描いた工作品が壁を埋めていた。園長は女性で、当方 三人ついていた)、狭い園庭いっぱい活発に遊び回り、 育つことが私たちの願いです」と希望に満ちて答えてい の問いに対して「国の未来と同様に子どもたちが明るく の部屋では子どもたちの明るい絵とベトナム風ザルに顔 と椅子を所定の場所に置きにいく。ある部屋では、積み 木ブロックに集中して何やら大きな物を共同製作し、 いてベトナム特有の麺を食べ、終わるとめいめいが食器 昼食となると、机数脚を集めたテーブルにおとなしくつ 園の建物は粗末で一クラス四○人の多さだが (教諭は二) ように、子どもたちは生き生きと学び遊んでいた。幼稚

をつくる」、「子どものための野球場をつくる」など夢と 四グループの共同作業だった。話し合いはベトナム語だ の暮らし」がテーマで、若い女教師の次々英語で出す質 希望がいっぱいの項目がたくさん並び、やがて四枚を黒 が、大きな紙に次々書かれるのは英文で、「美しい公園 は、「私が大統領だったら」という出題で、一○人ずつ 問に活発に挙手して英語で答え、「ベリーグッド」と認 められると実にうれしそうであった。授業の締めくくり 中学校では、英語の授業を参観したが、「都会と田舎

076

フェ大学教育学部では、夜間の日本語初級クラスで昼間働く二○代中心の男女が、薄いテキストを手に、たどしいが懸命に日本語を話した。日本人と話したのは、さらに楽しかったのは、教育学部で英語科教員養成い。さらに楽しかったのは、教育学部で英語科教員養成課程の五○人ほどのクラスと自由な対話を一時間近くやれたことだった。来年秋には巣立つ四年生で、女子学生れたことだった。来年秋には巣立つ四年生で、女子学生れたことだった。来年秋には巣立つ四年生で、女子学生れたことだった。来年秋には巣立つ四年生で、女子学生れたことだった。来年秋には巣立つ四年生で、大学と問働く二○代中心の男女が、薄いテキストを手に、たど間働く二○代中心の男女が、薄いテキストを手に、たど間動く二○代中心の男女が、薄いテキストを手に、たど間動く二○代中心の男女が、薄いテキストを手に、たど

報復的な行動もあったという。やがて隣国のカンボジアを映す鏡のようだ。しかし、南北統一、実際に北軍のは決して平坦ではなかった。北の解放戦線と南の傀儡政は決して平坦ではなかった。北の解放戦線と南の傀儡政は決して平坦ではなかった。北の解放戦線と南の傀儡政は決して平坦ではなかった。北の解放戦線と南の傀儡政は強して平坦ではなかるがえった後、南に属していた人がとのかなり多くは、新体制を恐れて国外脱出し、ボールピープルとして困難の道をたどった。

変したと、同行者の一人が語った。 で、国内を隣国諸国との間にも平和が訪れ前への移行)で、国内や隣国諸国との間にも平和が訪れ前のドイモイ(新思考、ベトナム式改革・開放・市場経済のドイモイ(新思考、ベトナム式改革・開放・市場経済のドイモイ(新思考、ベトナム式改革・開放・市場経済の

平和の文化が学校に地域にさらに世界へと広がり力をにアメリカは、アフガニスタンを空爆し地上戦にも兵をにアメリカは、アフガニスタンを空爆し地上戦にも兵を成が大売れだという。当面の相手タリバンが無力化したが大売れだという。当面の相手タリバンが無力化したのち、アフガン国内のいくつも民族の代表者が民族的なのち、アフガン国内のいくつも民族の代表者が民族的なのち、アフガン国内のいくつも民族の代表者が民族的なのち、アフガン国内のいくつも民族の代表者が民族的なのち、アフガン国内のいくつも民族の代表者が民族的なのち、アフガン国内のいくつも民族の代表者が民族的なの方、アフガニスタンを空爆し地上戦にも兵をにアメリカは、アフガニスタンを空爆し地上戦にも兵をにアメリカは、アフガニスタンを空爆し地上戦にも兵をにアメリカは、アフガニスタンを空爆し地上戦にも兵をにアメリカは、アフガニスタンを対したが、アフガニスタンをでは、アフガニスタンをである。

ことをめざしていきたい。 ら、やがては太陽のように明るく温かく大きな光になるなり、そしてそうした人びとの連帯により、小さな火か

増すには、まだ日が遠く多くの課題がある。だからとい

な生き方が、子どもたちの未来を明るくするともしびとって希望を捨ててはならない。一人一人の決意と具体的

多難な道を歩んできた。それらがおさまり、一九八六年北から兵が押し寄せ、戦闘するなどと、南北統一以降も問題にも派兵したし、中国からは「懲罰」として国境の